

平成紙



おりおりの記

昭和と高倉健

三井住友信託銀行株式会社 特別顧問
映画倫理委員会 委員

桜井

修

わが家では新聞を二紙しか通読していないが、昨年の暮、それぞれの俳句投稿欄の特選句は（石^つ路の花ただひと筋の男かな）と（冬の朝黄色い半旗^{かか}掲げけり）だった。この十七文字だけで、晩秋に世を去った俳優高倉健への心のこもった追悼句とわかる。前の句は、二百本を超えるその主演映画を一貫して彼が演じ続けた男性像であり、後の句は、代表作のひとつ『幸福の黄色いハンカチ』を踏まえたオマージュだ。

週刊誌や月刊誌も大掛かりな追悼特集を組んだし、テレビ各局も競^{きそ}って、かつての主演作を連日のように放映している。映画ファンの域を越えてこれほど広く市井の人びとから哀惜されたスターはあるまい。

ブレイクしたのは昭和40年代。スタートは任侠路線だったが、その後シチュエーションはさまざまでも、彼の演ずる主人公の一貫した肌合いが観客の熱い共感を呼んだ。無器用で寡黙。金や権力には無縁。自らの信ずる志操を（ただひと筋に）貫く。いつもストイックで背筋を凜と張り、必ず弱いものや滅びゆくものの側に立つ。観客はそのイメージを決して裏切られることなく、手放して画面にのめりこむ。

昭和40年代といえ、まさに高度成長^{まっただ}の真只^{なか}中。効率化や都市化の大波が容赦なく（古き良きもの）を押し流していた。そしてその流れに取り残された疎外感や失われてゆくものへの哀惜感が

マグマのように社会の底に溜^つっていた。当時超満員だった映画館のどよめきや歓声は、そのカタルシスの爆発だったろう。高倉健は、いわば（古き良きもの）の化身だった。



映画というメデ

ィアは、ひとつの時代を流れる空気や色合い、さらに価値観や美意識までありありと映し出す鏡といわれる。そして映画が国民的娯楽であった頃は、時代ごとにそのすべてを一身に象徴するような大スターを生んだ。たとえば、敗戦の混乱、焦土と闇市、虚脱感と解放感が入り交^{まじ}った昭和20年代は、戦地から復員したばかりの^{ただけ}猛々しい三船敏郎。高度成長に走り始めた高揚感と生活に美意識を求め始めた30年代は、カッコいい湘南族の石原裕次郎。そして戦後初めて社会に光^{かぜ}と翳^{かげ}が生まれた40年代が高倉健。バブルに酔い痴^よれた50年代は、既に斜陽となった映画をひとり支えた渥美清だろう。

もはや歳月の霧のなかに消え去ろうとする（昭和）という時代。三船も裕次郎も寅さんも既に世を去っている。高倉健はその最後の残光だった。